

『繁野話』第三篇「紀の関守が靈弓一旦白鳥に化する話」新論

劉, 菲菲
揚州大学

<https://doi.org/10.15017/4742092>

出版情報：雅俗. 19, pp.73-85, 2020-07-15. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



『繁野話』第三篇「紀の関守が靈弓一旦白鳥に化する話」新論 劉 菲菲

はじめに

都賀庭鐘の読本『繁野話』（明和三年刊）第三篇「紀の関守が靈弓一旦白鳥に化する話」（以下「紀の関守」）は、その序文に「手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぎ」と記されるように、中国唐代の伝奇小説『任氏伝』（沈既濟撰）と、『今昔物語集』卷三十四話「人妻化成弓後成鳥飛失語」（以下「人妻」）などに見える手束弓の故事を取り合わせて作られたものである¹⁾。『任氏伝』は美女に化した狐が男と契り、獵犬に正体を見破られて非業の死を遂げた話で、異類婚姻譚の中の珠玉作と高く評価されている。『太平広記』『類説』『虞初志』『情史類略』『艶異編』『太平広記鈔』『緑窓女史』『五朝小説』『龍威秘書』『唐代叢書』など、唐代以後の種々の類書や叢書に収められ、広く世に伝えられている²⁾。『任氏伝』は早くから日本にも伝わり、『源氏物語』『狐媚記』『続古事談』などにその受容の痕跡が確認される³⁾。手束弓の故事とは紀伊国の白鳥の関にまつわる手束弓の伝説で、『今昔物語集』『袖中抄』『後頼髓脳』『詞林采葉抄』などに見られる⁴⁾。

「紀の関守」は前半部分が「任氏伝」を、後半部分が「人妻」を、それぞれ下敷きとしている。後半部分はほぼ「人妻」の筋に基づいて話

を進めている。それに対し、前半部分は『任氏伝』の筋を忠実になぞっているように見えるが、両作品の本文をつぶさに比較対照してみると、細部の描写において多くの異同が見られる。そこで、本稿では、「紀の関守」と『任氏伝』の本文の表現に即して、創作の際に庭鐘がいかに『任氏伝』を意識し、どのように依拠と改変をおこなったのか、「紀の関守」に込められた庭鐘の創意工夫と創作意図を明らかにすることを試みたい。

まず、「紀の関守」と『任氏伝』の細部の描写を比較分析することで、庭鐘がどのような意図を込めて「紀の関守」の登場人物を造型したのか、その独自の創意工夫を具体的に検討する。さらに、庭鐘が「紀の関守」を通して、何を伝えようとしたのか、作品のモチーフについても論じたい。

一 『任氏伝』と「紀の関守」の梗概

論述に先立ち、両作品の梗概を掲げておく。

【任氏伝】唐の時代、鄭六という男は家が落ちぶれて、長安にいる親類の韋壺の許に居候する。韋壺は信安郡王の李禕の外孫で、若い頃から

放埒な生活をしていて酒に溺れる。鄭六も酒と女色を好んだため、韋崙と馬が合い、常に一緒に遊び回る。ある日、鄭六は街で美女に化した狐の任氏に巡り会う。鄭六は任氏が狐の変化であると知ってから、言い寄って契りを結ぶ。韋崙も任氏の美貌に惚れて鄭六のいない隙に手籠めにしようとするが、任氏は鄭六に操を立てるために必死に韋崙の暴行に抵抗する。韋崙は節操を貫く任氏に感服して自分の行動を深く恥じ入り、それ以後、鄭六と任氏の面倒をよく見るようになる。任氏は恩返しとして韋崙の気に入りの美女を斡旋する。後に、鄭六は武官として登用されて金城県（今陝西興平）に赴任することになる。任氏は鄭六との同行が不吉だと予知しつつも一緒に任地へ赴くことにするが、道中で獵犬に正体を見破られて噛み殺されてしまう。

【人妻】昔、ある男が妻と同衾中、妻が離別を告げる夢を見る。目が覚めると、妻は姿を消し、形見の弓一張が残っていた。それを妻の形見として日夜愛撫しているうちに、弓が白鳥に化して南へ飛び去る。男が後を追って紀伊国に辿り着くと、白鳥は再び人に変身する。男は化け物だと悟り、帰宅して「アサモヨイ」の和歌を詠じる。

【紀の関守】いつの時代か、紀伊国の山口庄司次郎有与という男は由緒ある家筋に生れて、紀泉の境にある雄の山の関守を務めていた。庄司次郎は生まれつき勇ましく、明け暮れ狩獵に奔走する。彼の家には先祖より一張の宝弓が伝わっており、その宝弓は獲物を射当てないことがない。庄司次郎の同族に橘雪名という者がおり、親の意に沿わぬ女・小蝶（狐の変化）を娶ったため家から追い出されて、小蝶ともども庄司次郎の許に寄寓する。庄司次郎は小蝶に横恋慕し、雪名の留守の時、手籠めにしようとするが、小蝶は力を尽くしてその暴行に抵抗

する。庄司次郎は節操を貫く小蝶に感服して自分の行動を大いに恥じ入る。それ以後、雪名夫婦と親しく付き合い、だんだん狩獵を怠って、風月の道に心を寄せるようになる。小蝶は仲人をして、庄司次郎と高向大夫の娘との結婚を調える。

和泉国に登美夏人という長者がおり、親の代から堅く殺生を戒め続けていた。継母が連れてきた娘（狐の変化）と結婚して、睦まじく十七年を過ごす。ある夜、夏人の夢の中に妻が現れて、自分は母の志を受け継いで一族の命を守るために、ここを離れて遠い所へ行くと語る。目が覚めると、妻は姿を消し、枕の上に一張の弓が残されていた。それから二年後のある日、その弓は白鳥に変じて家を飛び出る。夏人が後を追って紀泉の境に辿り着くと、白鳥はまた弓に変じて夏人の手に戻る。しかし、実はこの弓は庄司家が最近紛失した宝弓であった。夏人は雄の関の侍に捕まえられて、庄司次郎の所に連行される。

ある日、庄司次郎は宴会を設けて雪名夫婦を招く。小蝶は客殿の壁に掛けられている猛虎の絵を見た途端に、狐の姿に戻ってどこかへ逃げてしまう。その夜、庄司次郎、雪名、夏人は同じ夢を見る。夢の中で、小蝶は三人の男に次のように真相を打ち明ける。一族の命が登美の長者に何度も救われたので、母が報恩のため登美家に嫁ぎ、自分も夏人の妻になったこと。庄司次郎の殺生を制止するという母の志を受け継ぎ、狐一族の命を救うため、夏人の許を離れて、大和国に行つて庄司次郎の親類である雪名を誘惑して夫婦となったこと。それから、雪名を誘い出して庄司次郎の許に寄寓してその殺生を止めるように仕向けたこと。三人の男は夢から覚めて、一匹の狐の仕業に惑わされたことと悟り、それぞれ和歌を一首詠じて小蝶を偲ぶ。

二 小蝶の人物造型

小蝶は任氏に基づいて造型されているが、両作品の作者が人物造型に込めた意図は全く異なる。『任氏伝』は任氏と鄭六の異類恋愛を描くものである。狐の化身である任氏は情け深く節義の高い女として描かれており、沈既済は『任氏伝』を通して、任氏の記事及びその献身的な愛情や節義を世人に伝えようとしている。一方、「紀の関守」の創作意図について、庭鐘は『繁野話』の序文の中で、「邪色の人を蕩すことを覚す」と述べている。庭鐘は雪名と小蝶の異類恋愛を描くために「紀の関守」を創作したのではなく、また、小蝶を任氏のように立派な女性として造型する意図もない。そこで、以下では、「紀の関守」と『任氏伝』の細部の描写を比較分析しながら、庭鐘がどのようなねらいで小蝶という人物を造型したのか、その独自の創意工夫を具体的に明らかにする。

まず、正体がばれた後、小蝶が庄司次郎の夢に現れて自ら一部始終を明かす場面を見ておこう(50)。

我母といふも同じ狐にして、登美の長者が為に眷属の命を免る、事幾度ならず。其報として彼が家に掃櫛をとり、猶も雄の山の関守が殺生に耽るを制止せんと念ありて達せず。我其念を統て、先汝が宝弓を取隠し、我身のかわりとして重く夏人に預け、大和なる雪名をさそひ出し此所に来り、汝が魂を迷はしめて漸く殺生をとめ、望たんぬと思ふ事かなへば、又白狐を獵せらるゝこと
のうたてさよ。

小蝶の告白によれば、彼女は庄司次郎が殺生に耽るのを制止するとい

う母の志を受け継ぎ、狐一族の命を救うために、一連の計略を仕掛けて三人の男を惑わしたという。次に、小蝶がどのように計略を仕掛けて庄司次郎を惑わし、その殺生を止めるように仕向けたのかについて検討する。

小蝶と庄司次郎が初めて会う場面は次のように描かれている。

① 雪名が女房小蝶、年わかく生れ清らかなり。紡績の業におこたらず夫の衣服にそなへ、しかぐ賜るべき禄とてもなく、只糊口ばかりなるに、其居所の取かこみたるいとさぎよく、洒掃に心を用ひ万わびしからず。賤めきたるさまの見へぬは、雪名が国を出る時囊中に物ありてこそと人皆思へり。庄司次郎初て雪名が居所へ訪行たれば、雪名悦び心のかぎり饗応すれども、奴僕とてもなれば何をもふけません。妻も心苦しく籠にあたりて須臾に十余枚の蒸餅を造り、清き漆器に榭葉敷て盛出し、雪名諸とも殷勤に是をすゝむ。庄司是を食ふに其制うつくしく味田舎の品にあらず。是に茶を下して物語す。妻も時々客位のかたに向ひて、「かゝることなんなでうあるべき」。「是は得がたきことにこそ」など、物語を引立興する気はい、静閑なるが中に媚ありてなみの素姓にはあらず。雪名も此女の為にこそ親にもうとまれ故郷に得たまらでと思はる。是より常に来りて四方の雑談をかたりきこゆ。夫婦が心へだてなくしたしみけるほどに、いつしか庄司次郎不良心おこりて、これかれ戯れによせ情を合たる詞の端きらめけど、女何とも思はぬさまなり。

この場面描写は『任氏伝』に見えず、庭鐘の独創である。傍線部①に描かれるように、小蝶は生まれつき清らかで、夫の世話や家事を甲斐

甲斐しくこなす器用な女である。傍線部②で、小蝶は良い主婦を演じて懃懃に庄司次郎を招待する。傍線部③によれば、初対面の時、小蝶が庄司次郎に与える印象は、話を盛り上げるのが上手で、表は物静かであるが、中身には色気があつて、普通の女ではない。傍線部④のように、庄司次郎は小蝶に横恋慕して、時々軽薄な言葉で彼女を誘惑してみるのが、小蝶はその誘惑のサインに対して、拒もうともせず、何とも思わない振りをしている。小蝶の反応からして、彼女は庄司次郎の誘惑を平然と受け入れたようである。

小蝶の曖昧な態度に、庄司次郎は遂に恋慕の情が抑えられなくなり、雪名の留守の際、その家に忍び込んで小蝶を手籠めにしようとする。

① 昔より美女のかくる、は見へんが為といふなる、又は心得ずや有けん、白く小やかなる足先の扉の下より見へきたるに、こ、にこそとさぐりより、やをら抱とめて是を凌ぐ。女服せず力を極めてこれを拒ぎ、声たかく奮ひて、「かゝるふるまひあるまじ」といふく、女のちからにたへず。汗ながれて雨のごとく、「君がいぢなひに従ふべし」といつわりて庄司を推開、歎息一声して、「哀むべきことにこそ」といふ。其顔色惨然として人の心を傷ましむ。庄司あやしみて、「誰をか哀れむべき」と問ふ。女云、「外ならず、是雪名の哀むべきなり。われ一婦人の為に父に逐れ親属にうとまれ、朝夕に相頼とし憂に楽しきにかたらひ誘ふものとは、われならで誰かあるや。かく人に口もらふ身となりては、それをだに保つことあたはざるはあわれむべきにあらずや。君は此所の勢家として、我に勝加婢妾多あれども眼中にあらで、朝暮獵くらして楽とす。豪華の至りなり。今雪名は色に隠れたる貧士にして、

我身君の為に犯されば、是富貴を以て貧人を奪ふなり。豈大丈夫と言べけんや。」

〔紀の関守〕

① 室周視室内、見紅裳出於戸下。迫而察焉、見任氏戢身匿於扇間。室引出、就明而覩之、殆過於所佞矣。室愛之発狂、乃擁而凌之、不服。室以力制之、方急。則曰、服矣。請少廻旋。既従、則捍御如初、如是者数四。室乃悉力急持之、任氏力竭、汗若濡雨。自度不免、乃縦体不復拒抗、而神色惨変。室問曰、何色之不悦。任氏長歎息曰、鄭六之可哀也。室曰、何謂。対曰、鄭生有六尺之軀、而不能庇一婦人、豈丈夫哉。且公少豪侈、多獲佳麗、遇某之比者衆矣。而鄭生窮賤耳。所稱懷者、唯某而已。忍以有餘之心、而奪人之不足乎。哀其窮餒不能自立。衣公之衣、食公之食、故為公所繫耳。若糠糗可給、不当至是。

〔任氏伝〕

傍線部①の小蝶が力を尽くして庄司次郎の暴行に抵抗する趣向と、傍線部②の小蝶が理屈で見事に庄司次郎を説得する趣向は『任氏伝』に拠るものである。この場面はほぼそのまま『任氏伝』の場面描写をなぞっているが、両作品の女主人公の行動の裏にある意図は全く異なる。『任氏伝』では、韋釜は他人から任氏の美貌を聞いて好色心を起こす。鄭六のいない隙に、その家に忍び込んで任氏を手籠めにしようとするが、任氏は鄭六に操を立てるために必死に韋釜の暴行に抵抗する。それに対して、小蝶は雪名に操を立てるためではなく、庄司次郎を感心させるために、情け深く節義の堅い女であるように見せかけてその暴行に抵抗したと考えられる。小蝶は初めて庄司次郎と会った時に、良い主婦の一面を見せつつ、仄かな色気も出して誘惑のサインを送った。また、庄司次郎の誘惑に対して、拒もうともせず平然と

受け入れている。これらのことから、庄司次郎が小蝶を手籠めにしようとする行動は、小蝶自身が意図的に仕向けたものと推測される。

右の場面に引き続き、庄司次郎が小蝶の説得を聞いた後の行動が描かれる。

① 庄司此語を聞て野心頓に収り、女を引立手を拱て云、「我一時の暴悪前此を忘れし初事ぞや。尊嫂これを流水に附して胸中に淀みしむる事なかれ。我若此事に二念を引は、日比好める獵を、病にかゝり為ことあたはざる物なり」と、苦に断り聞へて出ぬ。其後雪名が気色を窺ふに少しも聞しらぬさまなり。女も前にかわらでかたり笑ふ。扱は女が我が為に面目をつゝみけるこそうれしけれと過つる誓ひも壞れやすきは此道、実なるかな猛き人の腰おれともなるならひ、庄司次郎いつしか心よわりして、日比の殺生もおこたりて獵狗は里の犬と群あそび、心しりの獵奴等も休息に退屈す。それのみならず雪名にかたらひて風月の道に心をよせ、花を賞し景を翫ぶ。

〔紀の関守〕

① 峯豪俊有義烈、聞其言、遽置之。斂衽而謝曰、不敢。俄而鄭子至、与峯相視哈樂。自是、凡任氏之薪粒牲餼、皆峯給焉。〔任氏伝〕この場面は『任氏伝』の趣向を踏襲せずに、大きな変更が施されている。傍線部①では、もし再び好色心を起こすならば、罰で病氣にかかり、好きな狩猟もできなくなるといふように、庄司次郎が小蝶に誓いを立てて懇ろに詫げる。一方、『任氏伝』では、峯豪俊は豪快且つ義烈の者であるから、任氏の説得を聞いてその節義に感心してすぐさま手を放して謝る。また傍線部②とそれに対応する『任氏伝』の記述を比較すると、峯豪俊はこの一件以後、任氏の生活に必要なものを全て提供し、

面倒をよく見るようになる。それに対して、庄司次郎は小蝶の影響でいつしか心が柔らかくなり、日々の殺生も怠つて風月の道に心を寄せようになる。ここまで小蝶は既にある程度、庄司次郎が狩猟に耽るのを制止するという目的に達したと言えよう。これら全てのことは実は小蝶が仕掛けた緻密な計略であった。

その後、小蝶はもう一計を巡らして、庄司次郎の殺生を止める。さらに、獵暮らしから婚姻生活に切り替えさせるように、庄司次郎の縁談を取り持つ。

① 人なきひまに女云、「むかしは婦節重からぬやうなるに、後世義氣にはげまされて、おのゝ天とし戴ける丈夫ありて、あはでの浦らば、我に赤繩の術あり、君が為に成就すべし」。庄司云、「我年来射獵を好み日々奔走していまだ婚を議するの念なし。錦部の高向大夫、女子あり。容儀の聞へ高し。殊に彼は其所の旧家なれば、むすび婚家とならんたがひに恥かしからず」。小蝶云、「わらは心得あり、必ず事成べし」。〔中略〕太夫聞て、「山口は古家なり。我懇望する所なれども、今の庄司は無益の殺生に獵くらす徒者のやうに人いへば、我心に欲せず」。刀拵子云「実に此事ありといへども、今は全く獵をとまり、常に過にし事を悔て、優にやさしき手ずさみに心をとめらる、よし、げにも久しく獵のよそおひを見はべらず」といふ。④ 左あらは我婿に取て恥なきおのこなり」と内意解て、山口庄司老党をやりて音問を通じ程なく婚姻を調へける。

〔紀の関守〕

任氏知其愛己、因言以謝曰、愧公之見愛甚矣。顧以陋質、不足以

答厚意。且不能負鄭生。故不得遂公歡。某秦人也、生長秦城。家本伶倫、中表姻族、多為人寵賤、以是長安狹斜、悉与之通。或有姝麗、悅而不得者、為公致之可矣。願持此以報德。崑曰、幸甚。廬中有鬻衣之婦曰張十五娘者、肌體凝潔、崑常悅之。因問任氏、識之乎。對曰、是某表姊妹、致之易耳。旬余、果致之。數月厭罷。

〔任氏伝〕

任氏が韋崑に美女を斡旋する趣向は、小蝶が庄司次郎の縁談を取り持つ趣向に改められている。『任氏伝』では、任氏は恩返しのために、崑の氣に入る美女を斡旋しようとし、おかげで崑は張十五娘と刁繩將軍の下女という二人の美女と契りを結ぶ。庭鐘は『任氏伝』のこの趣向をそのまま踏襲せずに、庄司次郎の狩獵という趣向をことさらに盛り込んでいる。傍線部①で、小蝶が庄司次郎に縁談の話を持ちかける時、庄司次郎は自分が日々狩獵に奔走するため、婚期が遅れていたと話す。傍線部②によれば、小蝶は知り合いの女医の刀拵子に頼んで、高向大夫にその娘と庄司次郎との縁談を持ちかけるが、高向大夫は庄司次郎が狩獵に溺れて無益な殺生をする悪戯者であると厳しくその人柄を評価し、一旦縁談を拒む。傍線部③で、刀拵子は、庄司次郎が既に狩獵をやめて常に過去の殺生を後悔しており、今はただひたすらに風流な手すさびに心を寄せていると、高向大夫の懸念を払拭するように弁解する。傍線部④によれば、高向大夫は庄司次郎が既に狩獵から手を引いたと聞いた後、ようやく心が打ち解けて、庄司次郎と娘の縁談を認めている。以上により、庄司次郎と高向大夫の娘の縁談は、庄司次郎が殺生を止めることを前提にして、うまくまとまっていることが分かる。ここまでで、小蝶の二つ目の計略も見事に成功している。

しかし、結局、自分の仕掛けた罠によって小蝶の計略が破綻した。折節によせて雪名夫婦をまねき重宝重器をつらね、山海の珍味をあつめて、饗宴す。一日殊更心を尽して設をなし夫婦をむかへけるに、女も粧ひを凝して入来り、既に客殿にいたりて席に進み、上段の壁にかけたる猛虎の竹を倒し風に咆吼する勢ひ、眼光人を射るがごときに、小蝶一目見てあとさげびて庭に飛しが、たちまち狐と化し築垣をこへ行がたしらずなりぬ。(中略)庄司次郎云、「さもありなんかし。此虎の絵は新筆なれども百済川虫の秀逸、高向大夫秘蔵なりしを婿引入れに得させし物なり。恐れて本形を露はすこと、画真のまつたき所あるや」と、語るなかばへ関の者ども夏人を取かこみ来て右の弓を持参す。

小蝶は庄司次郎の饗宴に出席する時、客室の虎の掛け絵の威力に怯えて正体がばれて、狐の姿に戻ってどこかへ逃げてしまった。注目すべきは、その虎の掛け絵は高向大夫が庄司次郎に贈った婿引出物だということである。前述のように、庄司次郎と高向大夫の娘との縁談は小蝶が庄司次郎の殺生を止めるために仕掛けた計略である。結局、小蝶は高向大夫が庄司次郎に贈った婿引出物によって、正体がばれてしまった。それは小蝶の言う如く、物事の命数である。

神なるかな掛画、虎威真に逼りて我が多年の通変を破る。是皆物の定数にして我が力に及ばざる所なり。

任氏もその命数から逃れられず、獵犬に正体を見破られて噛み殺された。

信宿、至馬嵬。任氏乘馬居其前、鄭子乘驢居其後、女奴別乘、又在其後。是時西門圍人教獵狗於洛川、已旬日矣。適值於道、蒼犬

騰出於草間。鄭子見任氏歔然墜於地、復本形而南馳。蒼犬逐之。

鄭子隨走叫呼、不能止。里余、為犬所獲。

武官に任用されて地方へ赴任することになった鄭六は、二人一緒に任地へ赴こうと任氏に頼み込んだ。任氏は鄭六との同行が不吉だと予知しつつも、自分の身の危険を顧みず、共に旅に出、そのために道中で獵犬に正体を見破られて命を落とした。任氏は愛情に殉じたと言えよう。作品の末尾において、沈既濟は、任氏のことを次のように評価する。

嗟乎、異物之情也有人道焉。遇暴不失節、狗人以至死、雖今婦人、有不如者矣。

異類の情にも人と変らぬものがあり、暴行に遇っても節操を失わず、夫に従って命まで投げ出した任氏が、今の婦人でも及ばぬ徳を持つているというように、任氏の献身的な愛情と堅い節義を讃えている。

もし虎の掛け絵ではなく、本物の虎が小蝶の正体を見破る設定に変えれば、小蝶も任氏のように噛み殺されることになるのであろう。小蝶は狐一族の命を救うために女に化して三人の男を迷わしたが、彼らに害を加えなかった。庭鐘は小蝶のことを思いやり、その結末の設定に特別な配慮を払って、虎の掛け絵でその正体を見破るという構想を練ったのであろう。

小蝶が逃げたその夜、庄司次郎の夢に現れてことの経緯を明かす。真相を知った後の庄司次郎の行動は次のように描かれている。

其根本は庄司次郎おのれが殺生より事おこりたればとて、此弓を長く庫蔵におさめ、其位にあらざりて無益の獵をなすは公を潜するなりと、みづからくやみしりて再び殺生に遊ばず。

庄司次郎は小蝶の件が自分の殺生によって起こったと反省し、過去の

殺生を深く後悔して狩獵を止め、二度と無益な殺生をしないようにと決意した。庄司次郎の改心は、小蝶が庄司次郎の殺生を制止する目的を果たしたことを意味している。

庭鐘は『繁野話』の序文の中で、「邪色とくしきの人を蕩とどろすことを覺さとす」と、本作の創作意図を示している。小蝶は一連の計略を仕掛けて三人の男を惑わし、遂に庄司次郎の殺生を止め、狐一族の命を救うという目的を果たした。その計略の一手段が男を惑わす「邪色」となっている。小蝶という人物像を通じて男に「邪色」を戒めつつ、その「邪色」によって「無益の殺生を制止する」という目的を果たさせる。これこそが、庭鐘が小蝶という女性像を作った意図であろう。

三 庄司次郎の人物造型

庄司次郎は韋崙に当たる人物として登場しているが、二人の人物造型には一つ大きな相違がある。すなわち、『任氏伝』には韋崙の狩獵という趣向がない。対して、「紀の関守」では、庭鐘は庄司次郎が狩獵に耽つて無益の殺生をするという趣向を新たに付け加えている。この点について、小蝶の人物造型を検討するにあたり既に触れたが、今度は庄司次郎と韋崙の人物描写の異同を比較分析しながら、庭鐘がどのように狩獵という趣向を庄司次郎に賦与したのかについて検討する。

「任氏伝」の冒頭部分では、韋崙は次のように紹介される。

有韋使君者。名崙、第九。信安王禕之外孫。少落拓、好飲酒。

韋崙は州の長官を務めており、信安王の李禕の外孫であった。若い頃から放埒な生活をしていて、酒好きであった。

韋崙はまた女道楽好きでもあった。「室姻族広茂、且夙従逸遊、多識美麗」の一文によれば、韋崙は若い頃から女遊びをしていて、美女をたくさん知っている。また、任氏の紹介した美女たちと次々に付き合う。

任氏の死を知った後、「崙驚訝歎息不能已。明日、命駕与鄭子俱適馬嵬、發瘞視之、長慟而歸」と書かれるように、韋崙は任氏の非業の死に非常に驚愕し、翌日わざわざ鄭六と一緒に馬嵬に赴き、任氏の亡骸を掘り返して、大いに悲しみ慟哭した。女色を好み、よく女遊びをする韋崙は情け深い一面も兼ね備えている。

庄司次郎は、韋崙のように酒色を好む男として造型されたのではなく、狩猟好きな男として描かれている。

「紀の関守」の冒頭部分では、庄司次郎は次のように紹介される。

① 有与といふもの家につたへて是を守る。多の家僕日次を挨て関を
つとむ。庄司次郎生得心武く、平日獵を好みて外の樂しみを要め
ず。又祖上より家に蔵せる一張の宝弓あり。鹿鳥の類矢ごろにだ
にあれば、射あてずといふ事なし。中る時は皆羽を飲で一箭に斃
る。近村四野の禽獸、此弓に獲らる、こと幾世幾年をしらず。

傍線部①によれば、庄司次郎は由緒ある家筋に生れ、紀泉の境にある雄の山の関守を務めており、生まれつき勇ましくて、狩猟が好きであるという。「平日獵を好みて外の樂しみを要めず」という一文は、庄司次郎が狩猟にはまっていることを示している。傍線部②によれば、庄司家の宝弓は獲物に射当てないことがなく、数えきれないほどの禽獸はこの宝弓によって射殺された。この部分は、庄司家の宝弓について語るとともに、庄司次郎の狩猟によって多くの禽獸が命を落としたこ

とを表している。

「我年来射獵を好み日々奔走していまだ婚を議するの念なし」の一文によれば、庄司次郎は日々狩猟に奔走しており、今まで結婚のことは考えたことさえない。「今の庄司は無益の殺生に獵くらす 徒者のやうに人いへば」の一文から分かるように、庄司次郎は狩猟を中心とした暮らしを送っている。

『任氏伝』の「鄭生有六尺之軀、而不能庇一婦人、豈丈夫哉」という一文は「君は此所の勢家として、我に勝加婢妾多あれども眼中にあらで、朝暮獵くらしして樂とす。豪華の至りなり。今雪名は色に隠れたる貧士にして、我身君の為に犯されば、是富貴を以て貧人を奪ふなり。豈大丈夫と言べけんや」に改められている。このように、庭鐘はあえて小蝶の言葉に庄司次郎の狩猟のことを盛り込んでいた。任氏は自分の女を守ることもできない鄭六のことを「豈丈夫哉」と哀れむのであるが、小蝶は、明け暮れ狩猟に溺れて自分の妾や下女を眼中にせず、却って貧しい雪名の妻を奪おうとする庄司次郎のことを「豈大丈夫と言べけんや」と非難する。

また、庭鐘は庄司次郎が小蝶に誓いを立てる言葉「我若此事に二念を引ば、日比好める獵を、病にかかり為ることあたはざる物なり」にも、その狩猟のことをさらに盛り込んでいた。そして、「庄司次郎いつしか心よわりして、日比の殺生もおこたりにて」と書かれるように、庄司次郎は小蝶への誓言を守り、いつしか心が柔らかくなり、日々の殺生から手を引いていた。作品の最後では、小蝶に真相を告げられた後、庄司次郎は自分の狩猟が小蝶の件の発端であると反省し、家蔵の宝弓を倉に収めて再び殺生をしないようにする。

以上見てきたように、庄司次郎の狩猟のことは作品の中に繰り返して書かれている。庄司次郎に関する描写はほとんど狩猟をめぐる展開されるのである。作品の所々に、「平日猟を好みて外の楽しみを要めず」「朝暮猟くらして楽とす」「日比好める猟」「日比の殺生」「射猟を好み日々奔走して」といった、庄司次郎が狩猟を好むことを示す表現が散見される。庭鐘は庄司次郎の狩猟好きを強調して描こうとしたため、あえてこれらの表現を作品中に用いたのである。

四 雪名の人物造型

雪名は鄭六に当たたる人物として登場している。『任氏伝』は鄭六を男主人公として造型しており、鄭六と任氏の間のある出来事をめぐって話を進めている。一方、「紀の関守」は雪名と小蝶の異類恋愛を描くために創作されたものではなく、庭鐘は雪名という人物に重きを置いて描いていない。雪名は、ただ庄司次郎の殺生を制止するという小蝶の目的を果たすために利用されて惑わされた男として設定されている。以下に、雪名と鄭六の人物像を比較しながら、雪名の人物造型において、庭鐘が原拠の上になどどのような独自の改変を加えたのかについて検討する。

『任氏伝』の冒頭部分では、鄭六のことは次のように紹介される。

其従父妹婿曰鄭六。不記其名。早習武芸、亦好酒色。貧無家、託身於妻族。与峯相得、遊処不問。

鄭六は峯の従妹の婿で、若い頃から武芸を習っていて、酒と女色を好む。あまりにも貧乏で持ち家もなく、妻の実家に居候する。峯と馬が合って、常に同行して遊び回る。このように、鄭六は酒色を好む

貧しい武人として描かれている。

任氏に出会った後、狐の変化であるを知りつつも言い寄って契りを結び、武官として登用された時には、同行が不吉であると予知した任氏を無理やり連れて行く。結局、任氏は任地へ赴く途中で、非業の死を遂げた。作品の末尾では、作者は、「惜鄭生非精人、徒悅其色而不徵其情性」というように、鄭六は聡明な人ではなく、任氏の美色に溺れるのみで、その情性を理解することができなかったと批評する。

次に、「紀の関守」では、雪名がどのように描かれているのかを見ていく。

庄司次郎家門古く、一族処々に多かるなか、今は音問たへぐなる大和の国人橋の村雄といふ人の末子雪名、親の気色かふむりて家を逐れ、妻を具して紀の国に來り、山口にたよりて扶助を乞ふ。庄司次郎頼もしき男にて、抱へ恵み咄し敵とするに、雪名生得すなをにして溫柔郷の人なれば、庄司悦び思ひて宜人求たりと、居るときは膝をくみ、出る時は馬をならべて狩す。

雪名は大和国の橋村雄という人の末子で、生まれつき素直で溫柔な性格の持ち主である。親の機嫌を損ねたため、家から追い出されて親族の庄司次郎の許に寄寓して、庄司次郎の援助に頼って生計を立てている。親に疎まれた原因は、雪名の言葉によると、

雪名いふ、「此女房は其はじめ遠国より売來るを親なるもの買とりて婢となす。我これにちなみて、親のさづけんといふ妻をうけがわざるゆへ、かくうとまれて遠くさまよひ來るにおよぶ」。

というように、親の気に入らない妻を娶ったからである。その妻はもと雪名の親が買取った腰元で、遠国から大和にやってきて、そ

の出身もよく分からなかった。このような出身不明の女を娶り、親と縁を切つて故郷を出た雪名は、軽率で頼もしくない一面も具えていることが窺える。雪名はこのような性格の欠陥を持つているから、小蝶に誘惑されて利用される対象となつた。

人物造型において、雪名は『繁野話』第八篇「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈る話」(以下「江口の遊女」)の男主人公の小太郎と似通う所がある。「江口の遊女」で、庭鐘は「すなをなる」「溫柔の性」「溫柔の人」といった表現を用いて、小太郎の性格を表している。素直で溫柔な小太郎は海賊の柴江に騙されて、一途に自分に尽くす遊女の杜十娘を裏切つた。「すなを」や「溫柔」といった表現の裏には単純で頼もしくないと意味合いが読み取れる。雪名と小太郎に似通う人物像として、『雨月物語』の中の勝四郎や正太郎を挙げることで、勝四郎と正太郎について、長島弘明『雨月物語の世界』⁽⁸⁾は、

『雨月物語』の若い男たちは、どこか頼りない。勝四郎や正太郎はもちろんのこと、ある意味では左門もまたそういう青年であつた。彼らは、いまだ生業をもつことができない(あるいは生業になじめない)モラトリアム人間——生活からの疎外者である。綱元の家を生れながら、家業に疎く、「過活心な」い豊雄も、もちろんその一人である。しかも豊雄は次男である。家を継がない次男は、昔の家の論理からすれば、基本的には余計者であつた。その次男坊が、家業の漁ではなく、風流韻事や学問に心ひかれていくのは当然かもしれない。

と述べる。家の末子で、親に勘当されて庄司次郎の扶持に頼り生業を維持している雪名は、まさに勝四郎や正太郎のような男である。また、

「そのみならず雪名にかたらひて風月の道に心をよせ、花を賞し景を翫ぶ」と書かれるように、風流を楽しんで、悠々自適な生活を送っている。

以上をまとめると、鄭六は女性の性情をよく理解できない一介の武人として造型されているのに対して、雪名は風流を好み、素直で溫柔な男として描かれている。

このような全く違うタイプの二人の男では、女の正体がばれた後の反応も、当然大きく異なってくる。任氏が獵犬に正体を見破られた後、鄭六の反応は次のようになっていく。

鄭子随走叫呼、不能止。里余、為犬所獲。鄭子銜涕、出囊中錢、贖以瘞之、削木為記。

鄭六は任氏の後を追つて走りながら喚いたが、うまく獵犬を止めることができなかつた。涙を湛えながら、袋からお金を取り出し、遺骸を買い取つた。そして、任氏の遺骸を埋葬した後、木を削り、目印を付けた。

鄭六は一介の武人であるとはいへ、任氏への愛情は真摯なものである。任氏の正体が狐であると知つてからも、彼女を愛し続けている。任氏が獵犬に襲われた時には、必死に追いかけて止めようとした。任氏の死に対しても、冷たくあしらつたのではなく、大いに悲しんでその遺骸も大切に扱つた。

一方、小蝶が虎の掛け絵によつて正体を見破られた後の雪名の反応は次のように描かれている。

雪名周章驚といへども、此すがたを見て人目を恥て追ひとらへんともせず。

雪名は小蝶の狐の姿を見た後、慌てて驚いたが、人目を気にして恥じ入り、追いかけてようともしなかった。小蝶の正体がばれた後の雪名の反応は、任氏の正体がばれた後の鄭六の反応と正反対である。鄭六に比べて、雪名の反応はあまりにも情けない。この改変は庭鐘が意図的に施したのである。そもそも雪名のような男は肝心な時に頼りになるはずがないからである。

なお、小蝶の正体を見た後、雪名が人目を恥じるといふ反応も、杜十娘が入水した後の小太郎の反応に似通っている。

彼小太郎は船中にあつて大に恥入り、心地くるはしく見へしがきつと悟りて思ふに、女が深情にそむきたるは残念なれども、彼は浮花の身のうへ、我も若年の浮気放蕩、彼は彼が侠に死し、我はわが儂にかへる(9)。

右のように、杜十娘の入水に対して、小太郎の最初の反応は恥を感じることである。雪名は小太郎と同じく、長年付き添っていた女を失うことよりも、先に自分の面子を考える男として造型されている。

おわりに

『任氏伝』は狐の任氏と人間たる鄭六の異類間の恋愛を描く作品である。任氏は狐でありながら、かえって人間以上の立派な、深い愛情と堅い節義を備えた女性として描かれている。作者は作品の末尾において任氏の節義と献身的な愛情を讃えている。一方、「紀の関守」は異類恋愛愛譚ではなく、「邪色の人を蕩すことを覚す」という戒めを含む教訓譚である。庭鐘は、小蝶が庄司次郎の殺生を止め、狐一族の命を救

うということを読まず、逆に男の立場から「邪色」に惑わされないように戒めている。

また、「紀の関守」の中には庄司次郎の狩猟という趣向が新たに付加されており、殺生を戒めるというモチーフも含んでいる。庄司次郎の狩猟はストーリーの発端であり、小蝶が種々の計略でその殺生を止めるといふ展開が話の根底を貫いている。「紀の関守」の中には「狐」が12回、「殺生」が9回出てきて、そのうち「無益の狐」と「無益の殺生」がそれぞれ1回出てくる。無益という表現から、庭鐘の狩猟と殺生に対する態度が窺い知れる。殺生を戒めるといふモチーフは小蝶が庄司次郎に狐裘の効用を話すことから窺える。

あなたが魂を迷はしめて漸く殺生をとめ、望たんぬと思ふ事かなへば、又白狐を狐せらるゝことのうたてさよ。しかしながら是人の言伝にて、狐裘何の宝となすべき。腋下の皮を縫あわせて色白きやうなれども、軀に重くして服御に堪はず、肌不平なり。年経て白狐となりしは毛落皮枯て裘となすに美観なし。此よし公に告て狐白裘の用なき事を啓し玉へ。(「紀の関守」)

小蝶はようやく庄司次郎を惑わしてその狩猟を止めたが、庄司次郎はまた朝廷から白狐の裘を献上する任を受けていた。そこで小蝶は、白狐の裘に特別な効用がないことを朝廷に伝えるよう、庄司次郎に頼み入る。江戸時代中期の随筆である神沢貞幹「翁草」と松崎堯臣「窓のすさみ」には、狐の生き肝を献上する任を受けた武士が狐に仕返しされる話が見られる(10)。「紀の関守」では、小蝶は復讐の形で庄司次郎に仕返したのではなく、計略を用いてその狩猟を止めるように仕向けた。庄司次郎も小蝶の告白を聞いた後、過去の殺生を悔んで、二度と

殺生をしないようと改心した。

つまり、「紀の関守」には「邪色じやくしきの人を蕩とらすことを覚さとす」と「殺生を戒める」という二つのモチーフが貫かれている。この点が、異類の悲恋を描き、任氏の猷身の愛情と堅い節義を讃えるという『任氏伝』の主題と大きく異なるところである。

原作の創作意図や主題をそのままに踏襲せず、ことさらに改変を加えて、独自のモチーフを作り出そうとする、翻案意識は庭鐘のほかの作品にも見ることができる。例えば、処女作の『英草紙』第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」では、庭鐘は、原作「闇陰司司馬貌断獄」の輪廻転生と因果応報の教えを説くというモチーフを踏襲せず、独自の歴史評論や運命論、地獄極楽論を開陳する。『繁野話』第八篇「江口の遊女」は、原作「杜十娘怒沈百宝箱」の李甲の不実を指弾し、妓女の杜十娘の真情を賞讃するという主題を全く利用せず、遊女の意気地を描き、「趣を得て早く身を抜く」という遊興の要諦を男に伝えている。『垣根草』第九篇「山村が子孫九世同居忍の字を守る事」では、原作「懐私怨狼僕告主」の「害人終害己」（人を呪わば穴二つ）という因果応報を鼓吹する主題を、人の短慮と短気を戒める主題に変える。庭鐘作には原作の大筋や構成を墨守している作品が多いが、原作とつづさに比較考察すると、加筆・省筆・改変の部分から庭鐘の創作意図や作品に賦与した独自のモチーフが推察できる。今後、中国小説が庭鐘にどのような受け入れられ、また実作されたのかを、作品の細部の描写や本文の表現を子細に比較分析することで具体的に検証したい。

注

- (1) 『繁野話』第三篇「紀の関守」の先行研究には、麻生磯次「読本の発生と支那文学の影響」（『江戸文学と支那文学』、三省堂、一九四六年）、徳田武「都賀庭鐘遊戯の方法——『英草紙』『繁野話』と唐代小説・三言——」（『日本書誌学大系51「日本近世小説と中国小説」、青裳堂書店、一九八七年、高田衛「奇談作者と夢語り——秋成・庭鐘・綾足たちの世界——」（『江戸幻想文学誌』、平凡社、一九八七年）、風間誠史「近世中期「小説」の上昇過程——たとえば、「浅茅が宿」へむけて——」（『日本文学』第38巻8号、日本文学協会、一九八九年八月）、関小妹「庭鐘と異類婚姻譚——『繁野話』第三話を中心に——」（信州大学教養部紀要第25号、一九九二年二月）がある。
- (2) 近藤春雄「中国学芸大事典」（大修館書店、一九七八年）「任氏伝」項を参照した。
- (3) 新聞「美」もう一人の夕顔——帚木三帖と任氏の物語——（『源氏物語の人物と構造』、笠間書院、一九八二年）、井黒佳穂子「『日本霊異記』上巻第二縁と『任氏伝』」（『専修国文』第76巻、専修大学日本語日文学会、二〇〇五年一月）。
- (4) 新日本古典文学大系80『繁野話』・曲亭伝奇花鏡児・催馬楽奇談・鳥辺山調綫（徳田武校注、岩波書店、一九九二年）注釈を参照した。
- (5) 「紀の関守」の本文引用は注（4）新日本古典文学大系80に拠る。
- (6) 「任氏伝」の本文引用は『太平伝記』第十冊（中華書局、二〇〇八）に拠る。中国語の繁体字を日本語通行の新字体に改め、句読点を補った。傍線は筆者による。なお、「任氏伝」の日本語の現代語訳に新釈漢文大系44「唐代伝奇」（内田泉之助・乾一夫著、明治書院、一九七一年）や中国古典文学大系24「六朝・唐・宋小説選」（前野直彬訳、平凡社、一九七七年）、「唐宋伝奇集」上巻（今村与志雄訳、岩波文庫、一九九五年）がある。
- (7) 狐女房が犬を恐れる話は日本文学において、『日本霊異記』上巻第二縁「狐を妻として子を生ましめし縁」や御伽草子の『木幡の狐』がある。この両作品の結末では、狐女房は犬に噛み殺されない。

(8) 長島弘明『雨月物語の世界』（筑摩書房、一九九八年）。

(9) 「江口の遊女」の本文引用は注（4）新日本古典文学大系80に拠る。

(10) 笹間良彦『怪異・きつね百物語』（雄山閣出版、一九九八年）。

〔付記〕 本稿は二〇一七年日本住友財団アジア諸国における日本関連研究助成

「初期読本における漢籍受容の研究」、二〇一八年中国国家社科基金青年項目「日本江戸時代汉学家读书札记整理与研究」(18CWW007)による成果の一部です。